6. 調査研究報告

富士地域における講行事の諸相

- 「講~人と人とをつなぐもの~」展より

井上 卓哉 (当館学芸員)

はじめに

常の生活においても大きな影響を与えるものであった。
ることにより、人と人との結びつきが強化され、そのつながりは日したものなど多種多様な種類がある。こうした講に参加し、活動すと目的としたもの、経済活動を目的としたもの、社会活動を目的と

の講に関係する資料が当館に収蔵されている。講は数えるほどとなっており、解散したり、消滅してしまった一部多くない。この状況は富士地域においても例外ではなく、かつてはなどにより解散したり消滅しており、現存しているものはそれほどしかしながら、講の多くは構成メンバーの高齢化や、社会の変化しかしながら、講の多くは構成メンバーの高齢化や、社会の変化

っていただく機会を提供したいと考えている。
かし、現在では失われつつある人と人との結びつきの姿について知月二六日~七月一日)の内容をもとに、各種の講の行事について紹構成した展示、「講~人と人とを結ぶもの」展(会期:平成二四年五次料および、各講の講員の方々からの聞き取り調査の成果をもとに本論では、これまで当館が収集してきた富士地域の講にかかわる

目次

富士地域の講

) 大山石尊講(今泉上和田

② 子安講 (今泉上和田)

③ 観音講(富士岡下河原

④ 蔡倫講(北松野)

⑥ その他講にかかわる館蔵資料⑤ 鳥居講 (岩淵)

引用・参考文献

おわりに

大山石尊講関係資料 表 1

昭和一

九年

九 四 四 九三八 九二八 九 二 一

講員名簿と地元での講の行事の当番帳(

昭和二七年まで 昭和一八年まで 昭和一一年まで

講員名簿と地元での講の行事の当番帳(講員名簿と地元での講の行事の当番帳(|講員名簿と地元での講の行事の当番帳(

昭和一三年 昭和三年 大正一〇年

昭和二八年

石尊講連名帳 石尊講氏名簿

昭和四五年 昭和三七年

九七〇

|地元での講の行事の参加者名簿(昭和五三年まで)

地元での講の行事の参加者名簿(昭和四五年まで)

九六二

富士地域の講

大山石尊講 (今泉上和田)

1

講の種類 活動内容 宗教的講

年三回(一月・五月・九月)の行事、 大山詣り

館蔵資料

(三年に一度)

えたとされる江戸時代の末期には、その人数は一六○人余にも及 んだという(平塚市博物館、 一九八七:六)。

資料名 大山石尊大権現のぼり 石尊當番牒 大山代金帳 明治二七年 明治三六年 明治三六年 明治三〇年 大正三年 嘉永二年 明治九年 年代 一八四九 一八七六 一八九四 九一四 一八九七 九一四 九〇三 九〇三 講員名簿と地元での講の行事の当番帳 講員名簿と地元での講の行事の当番帳(明治三九年まで) |講員名簿と地元での講の行事の当番帳(明治三五年まで) 講員名簿と地元での講の行事の当番帳 |講員名簿と地元での講の行事の当番帳(大正九年まで 講の行事の際の積み立て記録 地元での講の行事の際に掲げるもの 大山詣の際の記録

大田講の講教と檀家人物

	日再の再致と恒多八致		
現都県	郡	講数	檀家数
神奈川	三浦、鎌倉など12郡	2461	83218
東京	東多摩、西多摩など9郡	1075	58658
埼玉	北葛飾、中葛飾など18郡	2310	137520
千葉	安房、平など21郡	2668	123957
茨城	西葛飾、猿島など18郡	2211	65854
栃木	那須、塩谷など10郡	1113	41204
群馬	邑楽、新田など17郡	881	62796
福島	東白川、西白河など11郡	616	23356
新潟	南魚沼、古志郡	13	141
永野	南佐久、北佐久など8郡	278	5164
静岡	賀茂、那賀など18郡	1618	90366
山梨	南·北都留、山梨、八代、巨摩	460	12468
	合計	15704	704702

沿革と現状

世利益をもたらす神としても信仰の対象となっていた。 戸町人の社会では、特定の職人集団による参詣が盛んとなり、現 大漁祈願、病気平癒といった信仰を集めてきた。また、近世の江 くから石尊大権現を神体とする霊山として、雨乞いや五穀豊穣、 このような大山に対する信仰と、山頂に祀られている石尊社 大山は、神奈川県伊勢原市に所在し、関東近辺の村々では、古

験者をルーツとする人々であり、大山に対する信仰が最盛期を迎 集団によるものが中心であった。 御師(先導師)は、古くから大山を舞台に活動してきた山岳修

導師)と呼ばれる人々が関与して各地に組織された大山講という

(大山阿夫利神社)と中腹の大山寺を中心とした登拝は、御師 (先

する明治時代初期の記録によると、その範囲は関東近辺の一二県 ていた(平塚市博物館、 におよび、講数は一五七○四、檀家数は七○万四七○二人に達し それぞれの御師 (檀家)を持ち、表2に示した大山阿夫利神社が所蔵 (先導師) は、自ら担当する地域と講とその講 一九八七:七)。

さらには、大山の先導師である今坂銀次郎が発行し、明治三六年 旗が含まれている。また、地元での行事の当番を記した当番帳に もこれらの講の一つであり、当館に寄贈された大山石尊講にかか 社代参牒』といった資料も見られる。 ついても、嘉永年間から現在までに至るものが寄贈されている。 わる資料の中には、明治二七年(一八九四)に製作されたのぼり (一九〇三) より三年ほど使用された大山詣りの記録である 『講 富士市内の今泉上和田で現在でも組織されている大山石尊講

の名前を確認することができるが、現在(平成二四年)において 地元での行事の当番を記した『石尊連名帳』には、二四名の講員 これらの資料のうち、明治九年から明治一六年まで使用され、 講員は六名と減少している。

いる。 員を受け継がない家があり、 講に参加することができないといった理由で、代替わりの際に講 する家の家長が勤めてきた。しかし、生活スタイルの変化などで、 大山石尊講においては、講員は代々上和田の集落内で講に参加 講員の数は減少し、現在へと至って

行事次第

行事について取り上げてみたい。 行われる大山詣りである。ここではまず、講員宅で行われている 五月・九月の年間三回講員宅で行われている行事と、三年に一度 現在行われている大山石尊講の主たる活動内容は、 原則一月

祭壇にお参りし、 して、 食事をとる。 を飾り、 となった家で行われる。講を実施する当日の朝、家の庭に「大山 大権現(不動明王)」、「石尊宮本地仏(十一面観音)」の掛軸四本 は、昭和六三年に当時の講員の手によって作成されたものである。 石尊大権現」ののぼり旗を掲げる。現在掲げられているのぼり旗 また、当番の家では、床の間へ「阿夫利神社」(二本)、「石尊 講員宅で行われている行事は、講員が順番に当番となり、当番 夕方六時頃に当番の家へ講員が集ってくる。講員はまず、 その前に燭台を設置し、お神酒と白米を供えておく。そ 積立金を当番に渡した後、順次当番が用意した



写真1



床の間に掛けられた掛け軸

お不動明王大山石尊 はつだえ、金剛童子大山大小 懺悔ゝ六根清浄おしめに 帰命頂禮 お祈り奉ります 大山石尊並びに大山祇尊を 伊勢原市大山町に鎮座まします 相宿同児の御宿礼拝 大権現大天狗小天狗

の祝詞 外に出て、

を唱えていく。 わせて鈴を鳴らしながら祝詞 以外の講員は当番の音頭に合 数を数えながら奉読し、 当番は、数珠の玉で祝詞の回 全員で奉読することとなる。 塩と水で身を清める。 その後、床の間の前で上記 (ノット) を二五回 玄関先に用意した それ

食事の終了後、一度全員で



身を清める講員

写真3

れている行事は終了となる。

口ずつ食べていく。その後、

お神酒をいただき、講員宅で行わ

祝詞の奉読が終了すると、供えておいた白米を下げ、当番から

帰命頂禮

写真4 祝詞 (ノット) を唱える講員

の後、

先導師 (上和田の場合、今坂銀次郎)

の坊に宿泊し、

大

Щ

が大山へ参詣するというスタイルがとられていた。

大山阿夫利神社で御祓いを受けた後、神札を授かったという。そ

講員の方からの聞き取りによれば、大山へ参詣した世話人は、

へと帰ってきた。地元へと戻ってくると、講の行事を開催し、

より授かったお札類やみやげ物が講員へと配られていたとい

講員のすべてが大山に参詣するのではなく、講中の三人の世話人

山詣りを行っていたようである。ただし、代参とあることから、

年に大山詣りを行ったとの記載があることから、かつては毎年大

当館に寄贈された大山石尊講にかかわる資料のうち、大山詣りの

次に、三年に一度行われる大山詣りについて取り上げてみたい

記録である『講社代参牒』によれば、

明治三六年、三七年、三八





写真6 お神酒を飲む講員

写真5 米を食べる講員

う。また、参詣のための費用は、 た積立金が使用されていた。 毎月の行事の際に積み立てられ

る_。 うスタイルはとらずに、講員が毎月積み立てたお金を使って講員 その頻度についても、一年に一度から三年に一度へと変化してい 全員で大山へ参詣するような形へと変化することとなった。また しかしながら、昭和二○年代から三○年代にかけて、代参とい

2 子安講(今泉上和田

- 活動内容 講の種類 宗教的講
- 毎月二三日の行事、大祭(八月八日)
- 館蔵資料

『子安延命地蔵尊縁起』(六所家旧蔵資料

『子安延命地蔵尊縁起』(六所家旧蔵資料)

『子安延命地蔵尊略縁起』(六所家旧蔵資料

『享和元年子安地蔵堂再建立棟札写』(六所家旧蔵資料) 『元文二年子安地蔵堂再建立棟札写』(六所家旧蔵資料)

沿革と現状

安産、子育てなどを祈願する子安講という講が組織されている。 いる。今泉の上和田地区には、この子安地蔵堂に集り、子授けや 今泉八丁目の日吉浅間神社の南東には子安地蔵堂が鎮座して







写真8 子安地蔵堂の祭壇

六所家敷地、吉原公園などを境内地としていた東泉院という寺院 あるが、かつて子安地蔵堂の敷地および日吉浅間神社の敷地、旧 ると以下に記すような内容となっている。 (現在は廃寺) には、子安地蔵堂の縁起が残されており、 概略す この講がいつごろから組織されているのかについては不明で

立して日毎供養を行った。 淵と呼ぶとともに、一人の浄信士がその像を祀るための小宇を建 地蔵菩薩像が湧出した。地元の人々は怖れ敬い、この場所を地蔵 元享元年(一三二一)の六月二四日の早朝、富士浅間の深淵に

我はお産の厄を救い、母子ともに安らかに過ごせるようにこの世 し生けるものにとって、出産がもっとも苦しいものであるから、 そしてある日、地蔵菩薩がその浄信士の夢枕に立ち、「生きと

ができるのである。 寿命長遠、衆病悉除、財宝盈溢、衆人敬愛の御利益も授かることとによる女人泰産の御利益は推して知るべくもない。さらには、女性にとっての悩みは出産の苦しみであり、子安地蔵を祀るこはさらに熱心に供養を行い、多くの人々が集まるようになった。に現れた。我を子安の地蔵と名づけるように。」と伝え、浄信士

てまとめられたことがわかる。ており、元文元年(一七三六)に東泉院の僧、智勧坊賢盛によっるが、このうち、『子安延命地蔵尊略縁起』にのみ年号が記されこのような内容を記した縁起は、東泉院には三点が伝来してい

士市立博物館、二○一○)。

士市立博物館、二○一○)。

「編纂された可能性が指摘されている(阿部、二○○九および富安地蔵堂の縁起類は、堂舎の再建にあたって勧進事業を行うため要地蔵堂の縁起類は、堂舎の再建にあたって勧進事業を行うためまた、東泉院に伝来した資料の中には、略縁起がまとめられたまた、東泉院に伝来した資料の中には、略縁起がまとめられたまた。

している「子安地蔵尊御和讃」が唱えられている。川(和田川)としているものの、ほぼこの縁起の内容を下敷きに像が湧出した富士浅間の深淵を、子安地蔵堂の南に流れる御手洗さて、現在でも行われている子安講の行事の中では、地蔵菩薩

子安講の講員が唱えるようになったのかについては不明であるこの「子安地蔵尊御和讃」がいつ作成され、どのような経緯で

事例であるといえる。通じて地域に伝承されているという点においては、非常に貴重なが、近代に編纂された縁起が、現在に至るまで子安講という講を

子安地蔵尊御和讃

左に宝珠ささげられ 後の世までも聞きつたえ 祈れば必ずしるしあり これを人々聞きつたえ 子安地蔵と唱えよと 親子は共に長命し ひたすら我を念ずれば 産の苦難を救はんと ある夜信士の夢枕 尊像安置し奉り 里に一人の浄信士 光明あたりに輝きて 宝珠一つを捧げたる 此時里に程近き 里人驚きあやしみて 奇香馥郁ただよいて 昔後醍醐天皇の 右に錫杖持ちたまい 帰命頂礼地蔵尊 南無や子安地蔵尊 いと懇ろに告げ給う 二十四日の朝ぼらけ 浅間の泉の三津の 子安の地蔵あらはれ給う 清ければ 祈る人数限りなし 必ず安産いたすべし 現れ給うぞありがたや 南無や子安の地蔵尊 日毎日毎に参詣し 我世の中の諸人の 地蔵菩薩はあらわれて 供養怠りなかりける 御堂を此処に建立し 地蔵菩薩の御尊像 御手洗川の淵の辺に 未曾有の気立嘆じける 天に宝華はひるがえる 富士の麓の吉原に ほどこす財宝限りなし 六道輪廻の苦を救う 霊験あらたかなかりけば 言葉残して消え給う 子のなきものに子を授く 元享元年六月の 延命大士はありがたや この世の中に出でしなり

行事次第

けなどの手伝いを行っている。行事の際には、今泉上和田町の女性達が当番制三で準備や後片付日の行事、八月八日の大祭が行われている。そして、これらの各現在、子安講は一二人の女性により組織されており、毎月二三

れるほか、祈祷をお願いした人々にも配られる。は、講の行事を行っている間に子安地蔵堂に参拝した人々に配らり、行事で参拝者に配布する紅白の団子を作る。この紅白の団子の朝、当番の女性達は子安地蔵堂に隣接した地区の公会堂に集まここでは、まず例月の行事についてみてみたい。毎月の二三日

ても進めておく。
堂のお札やお守り、祈祷の受付などを行うため、その準備についを行っておく。また、当番の女性達は講の行事の際に、子安地蔵を行っておく。また、当番の女性達は講の行事の際に、子安地蔵

賽銭を祭壇にあげる。置されている燭台にロウソクを供える。そして、一人千円程度の置されている燭台にロウソクを供える。そして、一人千円程度の集まり、祭壇に線香をあげるとともに、祭壇に向かって左側に設一七時半頃から各自自宅で夕食をとった講員が子安地蔵堂に

に子供が安全に生まれるといわれている。妊婦が産気づいた際に火をつけると、ロウソクが燃え尽きるまで近婦が産気づいた際に火をつけると、ロウソクが燃えたものを持ち帰り、このロウソクについては、途中で火が消えたものを持ち帰り、

れ持鈴と鉦を自らの前に配置し、まず、鉦を鳴らしながら「南無一八時頃には講員がそろい、行事の開始となる。講員はそれぞ

まざまな経典や偈と呼ばれる文言を唱えていくこととなる。使って回数を数えていく。そして、表3に記したような順番でさいが、音頭をとる講員が持つ数珠の珠の数となっており、数珠を阿弥陀仏」を三五回唱える。この回数は決まっているものではな

の方々がお弁当を準備しておき、行事の終了後に講員へ配られる。解散となる。なお、正月と三月、五月、九月の行事の際には、当番なり、お手伝いの女性からお茶とお菓子が出され、雑談をした後、最後に、再び「南無阿弥陀仏」を三五回唱えれば行事の終了と

表 3 子安講手順

順番	経典・偈・和讃の名称	内容	唱える回数	鉦	持鈴
1	懺悔文	過去の悪い所行を懺悔する文言	3		
2	舎利礼文	仏教の経典の一つ	1	0	
3	念仏のみなもと	「南無阿弥陀仏」を唱えることで死後 は平等に往生できると説いた法然上 人について記したもの	1		
4	十句観音経	仏教の経典の一つ	3	0	
5	不明	南無法道亦南無多亦南無身我亦南 無観心陰法三無苦三円盡證は盡證	1		
6	不明	やすやすと生ませて給え子安さまわが一代はわすれますまい ありがたくおがむは和田の子安さま ご利 並さづけと参るひとびと たのむより めぐみもふかき子安さま たすけ給 えと参るひとびと	1		
7	子安地蔵尊御和讃	子安地蔵堂の縁起	1	0	0
	以下は正月、3月、5月、	9月の行事の際に子安地蔵尊御和讃	の後に唱える)	
8	西国三十三所御詠歌 3番	父母の 恵みも深き 粉河寺 ほとけの誓い たのもしの身や	1	0	0
9	西国三十三所御詠歌 4番	深山路や 檜原松原 わけ行けば 槙の尾寺に 駒ぞいさめる	1	0	0
10	西国三十三所御詠歌 1番	補陀洛や 岸打つ波は 三熊野の 那智のお山に ひびく滝津瀬	1	0	0
11	西国三十三所御詠歌 33番	よろず世の 願いをここに 納めおく 水は苔より 出づる谷汲	1	0	0



写真9 経典を奉読する講員



写真11 大祭の様子



大祭で御詠歌を披露する講員



から、

が、大祭の際には、配布しなければならない団子の数が多いこと

行事自体は夕方からの開始となり、まず講員がステージに上り、西国

講員も朝の五時頃から手伝いを行っている。

や各種団体などによる余興が始まるが、講員は子安地蔵堂へ移動する。 二十三所の御詠歌を披露する。その後、ステージでは、地域の子供たち

一九時頃には、今泉に所在する臨済宗のお寺である福応寺の住職

3 ていた講員も解散し、年に一度の大祭が終了することとなる。

安地蔵堂にこもり、大祭に来た希望者に念仏を唱えることとなる。

えた後、公会堂で軽食をとって帰るが、講員たちは二一時頃まで子 が子安地蔵堂へ来て、講員とともに念仏を唱える。住職は念仏を唱

ステージでの余興は二一時頃には終わり、子安地蔵堂にこもつ

写真10 雑談する講員

観音講 (富士岡下河原

- 講の種類 宗教的講
- 活動内容 毎月一七日の行事、 不定期の食事会
- 寄託資料

掛軸(観音図/伝白隠) 点)、線香立、線香差、持鈴、撞木 (2点)、掛軸 (十三仏図)、 輪棒 (2点)、鉦 (2点)、 木魚、桴、座布団 (2点)、茶湯器、マッチ入れ、輪(2点)、 観音像、 燭台 (3点)、高杯 (2

沿革と現状

集まり、大祭の参拝者に配る紅白の団子の準備を始める。この団

大祭当日は、早朝の三時頃から当番の女性達が地区の公会堂に

子作りについては、毎月の行事の際には当番の女性達だけが行う

出店が並び、にぎやかな雰囲気となる。

大祭の際には、子安地蔵堂の南西の敷地にステージが用意され

次に、年に一回、八月八日に行われる大祭についてみてみたい。

島沼湿地帯の境界を通る根方街道と、愛鷹山を源流とする赤淵川 富士岡下河原の集落は富士市の東部、愛鷹山の麓とかつての浮

る。富士岡下河原の集落もその一つで、富士市の中でも、古くかの斜面や、山麓の小さな扇状地に集落がほぼ等間隔に点在していまた、根方街道の沿線一帯は湧水地帯で、浸水してこない山麓代以前の東海道はこのルートを経由していたと言われている。の交わるところに位置している。根方街道の歴史は古く、平安時の交わると

ら人々が居住していた場所だといえる。

の中には、講員から寄進されたことがわかるものが残されている

寄進されたものと考えられる(写真14)。それ以外にも資料

ある女性の夫の祖父であり、少なくとも一〇〇年以上前に製作さ

久蔵」との銘があるが、この人物は最後まで観音講に加入していた

木魚・鉦が並べられる。このうち、

燭台の一つには「富士岡鈴木

(銘あり)・輪、

目に鈴・燭台・線香立・線香差・燭台・燭台

像・茶、二段目に、高杯に団子・飯とおかず・高杯に果物、

れ

終了とともに、博物館へ観音講に関係する様々な資料が寄託された。化などにより、平成一八年九月をもって終えることとなり、活動の富士岡下河原の観音講の活動は、講を構成している女性たちの高齢行事を行う観音講(十七日講)という講が組織されていた。しかし、その富士岡下河原の集落には、女性のみで構成され、観音信仰の

行事次第

講に加入していたため、三年に一度当番が回ってきたという。回していたが、もっとも多いときには、三五、六軒の家庭の女性がを交代で回り、開催されていた。近年では一二、三軒で開催場所を講の行事は月に一度、一七日の夜に、講に加入している講員の家

掛軸の前の祭壇には、写真13の様に、最上段左から水・観音隠禅師三(一六八五~一七六八)が描いたものと伝えられている。音図と十三仏図の二本の掛軸を掛け、その前に祭壇をセッティン番の家へ集まることとなる。当番の家では、前もって床の間に観番の家で集まることとなる。当番の家では、前もって床の間に観

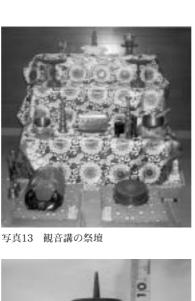




写真16 鉦(拡大)



写真14 燭台

写真15

用されたという。 用されたという。 用されたという。 には観音講の資料の中では、もっとも古いものとされ、また、鉦は観音講の資料の中では、もっとも古いものとされ、 田されたという。 田されたという。 田されたという。 田されたという。 日されたという。 日されたという。 日本は観音講の資料の中では、もっとも古いものとされ、 また、鉦は観音講の資料の中では、もっとも古いものとされ、

に使用される。

で使用される。

で使用される。

で使用される。

でで明の香典や、講の行事に使う道具の新調や補修、食事会などが、集まった賽銭は積み立てられ、講員の家族や本人に訃報があり、集まった賽銭は積み立てられ、講員の割断に任されていると、それぞれ祭壇にさて、観音講の講員が当番の家に到着すると、それぞれ祭壇に

月初めの大安の日に、次の当番へ行事の道具一式を渡すこととなる。 まい、あまり触られないような場所に置いておく。そして、次の その後、お茶やお菓子が出され、しばらく世間話や相談事をし とよばれる願いの言葉を唱えて、行事は終了することとなる。 とよばれる願いの言葉を唱えて、行事は終了することとなる。 とよばれる願いの言葉を唱えて、行事は終了することとなる。 をしたは、お茶やお菓子が出され、しばらく世間話や相談事をし とよばれる願いの言葉を唱えて、行事は終了することとなる。 一世回、般若心経を一回、御詠歌の一番から一〇番と三三番、 頭をとり、全員で南無阿弥陀仏を七回唱える。その後、十句観音 頭をとり、全員で南無阿弥陀仏を七回唱える。その後、十句観音

のようか。
のようか。
のようか。
のようか。
のた当時では、月に一度集まり、年に一度旅行に行くこの集まり方にテレビや気軽に旅行に行くといった娯楽が充実していなからにテレビや気軽に旅行に行くといった娯楽が充実していなからにテレビや気軽に旅行に行くといった娯楽が充実していなかった当時では、月に一度集まり、年に一度旅行に行くこの集まりった当時では、上記のような別に積み立てを行い、講員で温泉旅和四○年頃までは、賽銭とは別に積み立てを行い、講員で温泉旅和四○年頃までは、上記のような月の行事が中心に行われていたが、昭ろうか。

④ 蔡倫講(北松野)

- 講の種類 経済的講
- 活動内容 原則二月・一〇月の行事
- 寄託資料

表 4 蔡倫講関係資料

35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	No.
蔡倫講人名簿	蔡倫講人名簿	蔡倫講人名簿	蔡倫講人名簿	蔡倫講人名附賃金規定	蔡倫講人名簿	蔡倫講名寄簿	蔡倫講人名簿	蔡倫講人名簿	蔡倫講名寄簿	新規紙屋名寄帳	蔡倫講名寄帳	蔡倫講名寄帳	蔡倫講名寄帳	蔡倫講人名帳	蔡倫講人名簿	蔡倫講人名帳	蔡倫講人名簿	蔡倫講人名簿	蔡倫講規定扣簿	蔡倫講人名調査簿	蔡倫講連名帳簿	蔡倫講人名帳簿	蔡倫講人名之帳簿	蔡倫講規定簿	蔡倫講規定連名簿	蔡倫講規定簿		蔡倫講連名帳	蔡倫講連名帳	倫講規	倫講扣帳	倫講	倫講会日規	蔡倫講人数扣帳	資料名
明治四四	明治四三	明治四三	明治四二	明治四一	明治四〇	明治三八	明治三七	明治三六	明治三六	明治三五	明治三五	明治三五	明治三四	明治三四	明治三三	明治三一	明治三〇	明治三〇	明治二九	明治二九	明治二六	明治二六	明治二五	明治二二	明治二一	-1	明治一八	-	明治一四	明治一一	明治一一	明治八	慶應三	嘉永二	年
一九一	一九一〇	した一〇	一九〇九	一九〇八	一九〇七	一九〇五	一九〇四	一九〇三	一九〇三	一九〇二	一九〇二	したつこ	一九〇一	一九〇一	一九〇〇	ーハ九ハ	一八九七	一八九七	一八九六	一八九六	一八九三	一八九三	一八九二	一八八九	ーハハハ	ーハハ六	一八八五	一八八五	ーハハー	- ハ七ハ	一八七八	一八七五	一八六七	一八四九	代
七月二九日 参加者六六名	九月二〇日 参加者六五名	旧一月二六日 参加者五八名	旧八月二五日 参加者六三名	旧一二月一日 参加者七二名	三月七日 参加者八四名	旧一二月九日 参加者七五名	旧一一月二四日 参加者七六名	旧一一月四日 参加者七九名	旧二月九日 参加者八四名	入者の名簿明治三六年から大正九年までの新規参	旧一一月二一日 参加者八八名	旧二月二二日 参加者八八名	旧一一月二四日 参加者九二名	旧一月二三日 参加者九七名	旧一〇月 参加者九五名	一二月二五日 参加者九九名	旧一二月三日 参加者一〇一名	二月二八日 参加者八四名	一一月二四日 参加者三五名	二月二二日 参加者七八名	旧一一月九日 参加者七七名	旧二月二三日 参加者七二名	旧一〇月二七日 参加者七二名	旧一二月 参加者五八名	一月一四日 参加者六〇名	二月四日 参加者三六名	参加者六〇	〇日 参加	二月六日 参加者四七名	一月二九日 参加	月二〇日 参加者四二	者	一一月一九日 参加者四〇名	一一月吉日	備考

					_	_		_										_		_							
62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	No.
中陽製紙同盟会規約	製紙賃金表	紙業規約書	蔡倫講	蔡倫講規約帳	蔡倫講規定帳	蔡倫講規約帳	蔡倫講調帳	蔡倫講人名簿	蔡倫講人名帳	蔡倫講連名帳	蔡倫講人名簿	蔡倫講人名簿	名簿名簿倫講事連	蔡倫講人名及規約帳	蔡倫講人名簿	蔡倫講人名帳	蔡倫講人名簿	蔡倫講人名帳	蔡倫講人名帳	蔡倫講人名簿	蔡倫講人名簿	蔡倫講人名簿	蔡倫講人名簿	蔡倫講人名簿	蔡倫講人名簿	蔡倫講人名簿	資料名
	大正八	明治四二	昭和一四	昭和一二	昭和一一	昭和一〇	昭和一〇	昭和八	昭和七	昭和五	昭和四	昭和三	大正一四	大正一四	大正一三	大正一二	大正一一	大正一一	大正九	大正九	大正八	大正七	大正五	大正五	大正四	大正三	年
	一九一九	一九〇九	一九三九	一九三七	一九三六	一九三五	一九三五	一九三三	一九三二	一九三〇	一九二九	一九二八	一九二五	一九二五	一九二四	一九二三	一九二二	一九二二	一九二〇	一九二〇	一九一九	一九一八	一九一六	一九一六	一九一五	一九一四	代
紙同盟会の規約の製紙業有志者から構成される中陽製静岡市、阿部、庵原、富士の一市三郡	表中陽製紙同盟会が発行した製紙の賃金	したもの、九六名の署名あり松野における紙業の規約全一三条を記	一月一四日 参加者一〇名	旧一月二二日 参加者一一名	三月一六日 参加者一三名	一〇月 参加者一四名	二月 参加者一四名	旧一月一〇日 参加者一二名	旧九月三日 参加者一四名	旧一〇月二三日 参加者一三名	旧一一月二三日 参加者一七名	旧二月一九日 参加者一七名	を行った際の名簿か尽(定額を積み立て、分配すること)尽(定額を積み立て、分配することから、無代・花籤代の記載があることから、無旧四月二四日 参加者二七名 菓子	載あり 名の記載なし、「規約異條ナシ」の記名の記載なし、「規約異條ナシ」の記旧二月二四日および旧八月二四日 人	一〇月二日 参加者二七名	人名の記載無し、賃金等の記載あり旧八月二四日および旧一〇月一七日	金や総代選挙の結果の記載あり 旧一〇月二一日 人名の記載なし、賃	二月一四日 参加者三七名	等の記載あり 人名の記載なし、賃金	旧一月一〇日 参加者四四名	七月一〇日 参加者四四名	一月六日 参加者四〇名	一二月二七日 参加者四二名	二月一六日 参加者四一名	旧八月二四日 参加者三八名	旧一二月一二日 参加者二一名	備考

うになった。河半紙」と呼ばれる、手すきによる和紙作りが盛んに行われるよ河半紙」と呼ばれる、手すきによる和紙作りが盛んに行われるに行われた幕府の殖産興業の奨励と出版事業の増加の中で、「駿山梨県から静岡県にいたる富士川の流域では、江戸時代の中頃

県教育委員会文化課県史編さん室編、一九九三:九七)。近くが職人を雇い、相当な規模で和紙作りが行われていた(静岡も「駿河半紙」の産地の一つであり、明治時代末期には一○○軒富士川の西岸に位置し、富士宮市芝川に隣接する北松野の集落

た蔡倫講と呼ばれる講にかかわる資料が残されている。この北松野の地域で和紙作りに携わっていた人々が組織していを作り続けていた石川文夫氏(大正一三年生まれ)のお宅には、昭和末期にはほとんど行われなくなってしまうが、最後まで和紙昭和末期における和紙作りは、大正時代の初期から徐々に衰退し、

がかけられることにある(写真17)。といわれる古代中国の人物、蔡倫の画像と紙の由来を記した掛軸といわれる古代中国の人物、蔡倫の画像と紙の由来を記した掛軸この講が蔡倫講と呼ばれる由来は、講の行事の際には、紙の祖

事の際にかけられる蔡倫の掛軸を始め、江戸時代末期の嘉永二年る職人の賃金などを講の組織が存在することにより、和紙作りに携った。このような講の組織が存在することにより、和紙作りに携わる各家の間で差や違いが生まれないような形がとられていた。とから、和紙の原料の仕入れ価格や製品の販売価格、雇い入れことから、和紙の原料の仕入れ価格や製品の販売価格、雇い入れ

資料が含まれている。料、明治四二年(一九〇九)に作成された「紙業規約書」などのや、講の行事の参加者について記した「蔡倫講人名簿」などの資(一八四九)から昭和一四年(一九三九)にかけての講員の名簿



多かるべし 初て穀皮麻頭幣布魚網煮て擣して以て紙となす、 紙を作ると云わ不可なり、 鄲淳抔よく紙をつくるといゑり、学斎佑異に曰、蔡倫始て紙を 紙とす、元貞元年是を奉しむ。和帝其能きをよみせられ、 並ニ人の便ニあらす、蔡倫思を廻し樹膚麻頭及ひ幣布魚網を以て 是をなす、其縑帛を用ゆる者是を紙と云、縑ハ其価尊く管位おも、 めて書す、今の世の黄紙のことし、 ありとみへたり、応則か日薄に紙なり、孟康か日紙を赤らし 傳に曰、此時初て作にあらす、倫か作る所前世ニありしより精工なり、 作といえとも必しもしからす、 後漢書蔡倫伝曰、いにしえより書契多くハ竹管を用編て 下従て用ことことく世に蔡倫紙と云。 前漢趙兆■可傳ニ蔡倫■中赫蹏書 蔡倫は後漢之人なり、 以て紙となす、故ニ世ニ紙前漢之時既ニ紙あり、蔡倫 古今原始二此時佐伯毛弘邦 前漢の書外戚 是より天 初て

僧の曇徴貢上す、此人能紙墨きを作、此■初むるとかや本朝にては曇徴より始まる、推古天皇十八年の春高麗王



写真18 紙を漉く石川文夫氏



写真19 石川文夫氏が使用した紙すきの道具

いたことを現代に伝える貴重な資料群であるといえる。川流域の各地において、手すきによる和紙作りが盛んに行われてなわれていない。こうした状況にあって、これらの資料は、富士現在、富士川流域では、手すきによる和紙作りはほとんどおこ

行事次第

講員が集合すれば、前述したように和紙の原料の仕入れ価格やの作業が終わった夕刻頃から次々に講員が当番宅へ集ってくる。では、行事当日に床の間などに蔡倫の掛軸をかけておき、紙作りでは、行事当日に床の間などに蔡倫の掛軸をかけておき、紙作りる家が交代で当番となり、原則として毎年二回、一○月と二月の石川文夫氏からの聞き取りによると、蔡倫講の行事は、講員の

⑤ 鳥居講 (i)

製品の販売価格、雇い入れる職人の賃金などを相談し、決定する

こととなる。

その後、

お酒とおつまみが振舞われ、

行事自体は終

- 再り重頁 足数句
- ・活動内容 一二年に一度、申年の年に富士山中に鳥居奉納・講の種類 宗教的講
- 沿革と現状

官士川の西岸、かつて東海道の間宿であった岩淵の集落では、 富士川の西岸、かつて東海道の間宿であった岩淵の集落では、 富士川の西岸、かつて東海道の間宿であった岩淵の集落では、 により行われている。現在、この行事は、岩淵神社委員会(岩淵の人坂神社、水神宮、妙見神社を管理する委員会・岩淵地区を構めずる相生、朝日、舟山、上町、坂下、よしずの六部落より四人成する相生、朝日、舟山、上町、坂下、よしずの六部落より四人の場出される。 第1111年に一度、中の年に富士山頂に白木の鳥居を奉納するという により行われている。

山に鳥居を奉納するようになったと言われている。であった富士山麓から手に入れていた。このお礼のために、富士業に携わっており、毎年新たに作られる渡船の船材を浅間神社領がら岩淵の集落は、江戸時代に幕府の命により、富士川の渡船事で行われるようになったのかについては定かではない。しかしな富士山頂に鳥居を奉納するというこの行事が、どのような経緯

ている。

でいる。

でいる。

でいる。

でいる。

でいる。

でいる。

でいる。

でいる。

でいるもので

でいるもので

でいるものがあり、

でいるものと考えられている。

でいるものに

でいるものがあり、

でいる。

川町教育委員会、一九八一より一部転載)。されている(「ふるさと富士川 第二集 昔ばなし 伝説」、富士にはその由来として、以下に述べるようないくつかの説話が伝承また、ここで述べたような鳥居奉納の経緯以外にも、岩淵の地

説話1 「白髪の老人と百助さん」

こともありました。を主な売り場にしており、時には富士山の麓の里まで売りに行くを主な売り場にしており、時には富士山の麓の里まで売りに行くさば屋(魚の行商をする人)で、富士郡の根方地方や富士の上方昔、岩淵の下宿に百助さんという人がいました。百助さんはい

うとう富士山の頂上に来てしまいました。百助さんはどこまで行くのかな、と思いながらついていくと、といて来なさい。」といって、スタスタと山へ登っていきました。老人は百助さんに「お前の持っている魚を全部買ってやるからつある日、百助さんは白装束をした白髪の老人に出会いました。

頂上につくと、老人は池を掘りました。そして、百助さんの持

と、白煙が立ち込めてその中に姿を消してしまいました。に魚の代金と巻物を渡すと、箸で鳥居を作り、この鳥居をくぐるていた魚の中のコノシロだけが泳ぎだしました。老人は百助さんっていた魚を全部この池に入れると、不思議なことに塩漬けにし

の後も一二年ごとの申年に鳥居を上げています。
村で鳥居を上げることにしました。この年は申年だったので、そ士山の神様で私達にお告げをしたのに違いないと話し合い、岩淵に話しました。村人たちは、百助さんが会った白髪の老人は、富と書いてありました。早速この不思議な出来事と巻物の話を村人た。巻物には富士山頂に一二年ごとに鳥居を上げてくれるように百助さんは家に帰ると、老人からもらった巻物を開いてみまし

説話2 「近江の大名と鳥居寄進

やがて、この大名は何かの事情で失脚して、領地を取り上げらる時、この大名が家来を従えて領内を巡回して、ある村に泊まりました。旅の徒然に土地の物知りを召して話を聞きました。いろ面白い話がありましたが、その土で富士山ができた。」という話がありました。旅の徒然に土地の物知りを召して話を聞きました。いろました。旅の徒然に土地の物知りを召して話を聞きました。いろました。旅の徒然に土地の物知りを召して話を聞きました。いろまでもあるのだ。」と大層喜んで、富士山ができた。」という話がありました。という話がありました。という話できたのだ。」と大層喜んで、富士山ができた。」という話がありました。方に、富士山の頂上に白木の大きな鳥居を寄進してきました。

うになりました。 失脚した後も、大名に代わって富士山へ白木の鳥居を寄進するよしてくれていたので、岩淵の人々はこの大名に同情して、大名がこの大名は、岩淵の人たちを大変かわいがり、いろいろな援助をれてしまい、富士山へ鳥居を寄進することができなくなりました。

説話3 「鳥居寄進と岩淵の里のおこり」

した。心願のすじがあって、富士山に鳥居奉納を申年ごとに続けてきま心願のすじがあって、富士山に鳥居奉納を申年ごとに続けてきま善昔、西国のあるところに岩淵某という人がいました。この人は

と言って息を引き取りました。うそれもできない。何卒私に代わって鳥居を奉納して欲しい。」願あって申年に富士山に鳥居を奉納してきたが、この病では、も察した岩淵某は、里人に「私は西国に住む岩淵という者だが、心まで来たところ、急に病にかかり、倒れてしまいました。死期を「何回目かの申年に、鳥居を奉納するために、富士川の岸辺の里

に富士山に鳥居を奉納することにしました。してやりました。その後、この里を岩淵の里と名付け、申年ごと里人たちは、大層憐れんで旅人の代わりに鳥居を富士山へ奉納

する信仰に関連する各種伝説をもとに、鳥居奉納の行事の由来を二集 昔ばなし 伝説」を編纂した稲垣甲子男氏は、富士山に対ここで紹介したような説話については、「ふるさと富士川 第

いる(富士川町教育委員会、一九八一:八九)。古い時代に位置づけようとしたものではないかとの指摘をして

分に考えられる。 また、天保年間(一八三〇-一八三四)に国学者、新庄道雄にまた、天保年間(一八三〇-一八三四)に国学者、新庄道雄によってまとめられた『駿河国新風土記』には、本人が文化五年(一八四大の一年の後の鳥居を納にかかわる記録としては、嘉永元年(一八四大の一年に岩淵の人々、九人が村山口登山道のスタート地点である村山の宿坊、大鏡坊に頂上の鳥居の祝儀を収めたことを示すこの記録を見ると、通常であれば富士登山の際に必要とされるこの記録を見ると、通常であれば富士登山の際に必要とされるこの記録を見ると、通常であれば富士登山の際に必要とされるこの記録を見ると、通常であれば富士登山の際に必要とされるこの記録を見ると、通常であれば富士登山の際に必要とされるこの記録を見ると、通常であれば富士登山の際に必要とされる。

このような形で富士山に鳥居を奉納することを認められている。ことなく受け継がれてきた行事であるといえる。それとともに、明治四一年(一九〇八)から平成一六年(二〇〇四)にいたに、明治四一年(一九〇八)から平成一六年(二〇〇四)にいたことなく受け継がれてきた行事であるといえる。それとともに、明治四一年(一九〇八)から平成一六年(二〇〇四)にいたことなく受け継がれてきた行事であるといえる。それとともに、明治四一年(一九〇八)から平成一六年(二〇〇四)にいたことなく受け継がれてきた行事であるといる。

事としては、非常に貴重な事例であるといえよう。 集団は岩淵鳥居講のみであり、富士山に対する信仰にかかわる行

行事次第

いて、取り上げてみたい。に、平成一六年(二〇〇四)の申年に行われた鳥居講の行事につに、平成一六年(二〇〇四)の申年に行われた鳥居講の行事につここでは、岩淵の八坂神社委員会の方々からの聞き取りを中心

一○年より毎年五○○円ずつの集金が行われた。
「鳥居作成費、移動費など)をまかなうために、平成一六年の鳥の人々から構成されるが、鳥居奉納にともなうさまざまな経費の人々から構成されるが、鳥居奉納にともなうさまざまな経費神社の氏子、そして、奉納の際だけ参加費を払って参加する一般神との、そして、奉納の際だけ参加費を払って参加する一般神社の氏子、そして、奉納の際だけ参加費を払って参加する一般神社の氏子、そして、奉納の際だけ参加費を払って参加する一般神社の氏子、そして、本納の際には、未納の際には、岩淵の家庭のでは、岩淵神社委員会、八坂ら準備が、大田の際には、岩淵の家庭のでは、岩淵神社委員会、八坂ら準備が、大田の際には、岩淵の家庭が行われた。

方、鳥居の梁になる部分(笠木、島木、貫等)は、神社委員

行っているという。 行っているという。 では、鳥居の寸法については、前回(平成四年)の奉納の際から、 以一の一人である柳下壽万氏の工場で仕上げられた。柳下氏によび、静岡市の製材屋より角材の状態で購入し、神社委員会のメン会が静岡市の製材屋より角材の状態で購入し、神社委員会のメン

成した鳥居が八坂神社の境内で披露された。日は、八坂神社の祭礼が行われており、その祭礼に合わせて、完六年については、七月二四・二五日に行われた。その前日の二三六年に高士山への鳥居の奉納は七月下旬に行われるが、平成一

行事に参加することとなる。 社の氏子は、背中に棕櫚の紋が入ったさらしの法被を身にまといまってくる。この際、神社委員会のメンバーは紋付袴で、八坂神費を納めた一般の参加者の総勢一五一名が八坂神社の境内に集弾社の氏子(岩淵地区を構成する各部落の代表者)そして、参加翌日の早朝、鳥居講の講員である神社委員会のメンバー、八坂

れる。

さらし布に巻かれて、富士山本宮浅間大社までトラックで運搬さは一度解体され、八坂神社の氏子達の手によって部材はそれぞれは一度解体され、八坂神社の修祓式が執り行われた。その後、鳥居司の手により、鳥居出発の修祓式が執り行われた。その後、鳥居



写真21 鳥居奉納の記念写真(平成16年) 柳下壽万氏提供



写真20 岩淵鳥居講一行(明治41年) 若月正己氏提供



写真30 ブルドーザーで運搬される鳥居



写真26 講員により運搬される鳥居の部材



写真22 前回に奉納した鳥居の解体作業



写真31 山頂付近で組み立てられる鳥居



写真27 富士山本宮浅間大社に到着した鳥居 と講員



写真23 岩淵の八坂神社境内にて新しい鳥居 のお披露目



写真32 立ち上げられる鳥居



写真28 浅間大社での神事



写真24 八坂神社での神事



写真33 完成した鳥居



写真29 五合目から登山する講員



写真25 鳥居の解体

講員とともに、新五合目までトラックとバスで移動することとなる。祈願する修祓式が執り行われた。式の後、再び鳥居は解体され、で鳥居を組み立て、浅間大社の宮司により、奉納と登山の安全を講員はバスに分乗して浅間大社まで移動し、あらためて楼門前

講員は五合目より各自登山を行う一方、鳥居の部材はブルドーにて山頂まで運搬されることとなる。かつては、鳥居講の講情付近に唯一残る過去の鳥居を見ると、講員や強力たちが運びやて執り行われる神事を受けると、いよいよ鳥居の建立となる。かつては、鳥居はめ、平成一六年の場合は、すでに奉納の一週間前に前回の鳥居はめ、平成一六年の場合は、すでに奉納の一週間前に前回の鳥居はめ、平成一六年の場合は、すでに奉納の一週間前に前回の鳥居はめ、平成一六年の場合は、すでに奉納の一週間前に前回の鳥居はめ、平成一六年の場合は、すでに奉納の一週間前に前回の鳥居はめ、平成一六年の場合は、すでに奉納の一週間前に前回の鳥居はか、平成一六年の場合は、すでに奉納の一週間前に前回の鳥居はか、平成一六年の場合は、すでに奉納の一週間前に前回の鳥居はか、平成一六年の場合は、すでに奉納の一週間前に前回の鳥居はか、平成一六年の場合は、すでに奉納の一週間前に前回の鳥居はか、平成一六年の場合は、すでに奉納の一週間前に前回の鳥居はか、平成一六年の場合は、すでに奉納の一週間前に前回の鳥居はか、平成一六年の場合は、すでに奉納の一週間前に協力してくれた中で、富士山の強力に対している。

鳥居が奉納されるのである。ながら鳥居を立ち上げ、前回の鳥居が立っていた場所へと新しいが組み立てられる。そして、多くの講員が協力してロープを引き、奥宮での神事の後、建立場所付近で氏子達が中心となって鳥居

新しい鳥居が奉納されると、講員全員が鳥居周辺で記念写真の

帰路につくこととなる。撮影を行い、鳥居講の全行事が終了となり、それぞれ順次下山上

■コラム『鳥居の柱の寄進と勢子辻のくらし』

生まれ)によって寄進されたものである。柱は、富士市勢子辻にお住まいの林業家・室伏由隆氏(昭和八年平成四年と一六年に鳥居講の講員によって奉納された鳥居の

の祖父・由平氏は、金原明善の書生をつとめ、勢子辻の開拓やそ というが、現在へ繋がる集落の基礎は、 啓蒙のための造林に端を発し、積極的に造林事業が進められてきた。 開拓や植林を主導した人物として知られる金原明善をはじめとす 茅場として利用されてきた場所であるが、天竜川の治水、北海道の 林が広がっている。このあたり一帯はもともと富士山麓の人々の \mathcal{O} 人々の手によって明治時代に開かれたという。なかでも室伏由降 いたとの話が伝わっており、古くから人が住んでいた場所である いたという話や、豊臣秀吉による小田原征伐の際の落人が住み着 る静岡県山林協会が、明治三五年から三八年にかけて行った植林の 室伏家ではこの地域の造林事業を担っている。 に位置する富士市最北端の小集落で、集落周辺には広大なヒノキ 後の造林に尽力した人物である。由平氏の後、 勢子辻は富士山の東麓、富士市と裾野市を結ぶ十里木街道沿 室伏氏によると、勢子辻には、神代杉を掘るために人が住み着 地域の造林事業に携わる 三代にわたって

さて、室伏氏が鳥居の柱を寄進するようになったきっかけは、

鳥居講の講員からの依頼によるものであり、富士山の山麓で育て いうことで快諾するようになったという。 てきた自分の家のヒノキが富士山の山頂にあげられるならばと

いても、 室伏氏によれば、平成二八年に予定されている次回の鳥居講につ き、翌年の鳥居製作に合わせて皮を剥いて磨きをかけて寄進した。 の部分を切り取り、それを切り株に差し込んでお神酒を振り掛け 話しかけ、チェーンソーで伐採した。その後、ヒノキの一番先端 であった。伐採に際しては、ヒノキの木に「今から切ります」と あり、室伏氏の祖父、由平氏が植えた樹齢が約一○○年ほどのもの て伐採が終了となる。そして、皮をつけたまま倉庫で寝かしてお 伐採を行ったという。伐採したヒノキは、自宅すぐそばの林の中に 平成一六年に寄進した鳥居の柱については、前年のお盆明けに 鳥居の柱の寄進を希望しているという。

時代に分祀したもので、かつては集落のすべてが造林事業に携わ 南東麓の杣人達の信仰を集める御殿場市神場の山神社より明治 軒となってしまったが、勢子辻の開拓以来、集落の人々の手によっ 全戸一二軒の家で飾り付けや掃除などの祭礼の準備を行った。そ っていた勢子辻の人々の安全と健康を祈願する場となっている。 前後) に執り行われる山神社の祭礼がある。 この山神社は富士山 て行われている行事に、春(四月一七日前後)と秋(一〇月一七日 平成二四年四月一七日に執り行われた祭礼では、午前八時より 現在、勢子辻の集落で造林事業に携わっている家は、室伏家一 神場の山神社より神主を招き、 集落の人々だけではなく

> 奉読、 り祭礼が始まった。祭礼の次第としては、 勢子辻周辺に立地する企業の関係者などが参加して、午後一時よ 直会を行い、祭礼の終了となった。 修祓、祝詞奏上、玉串拝礼を行い、 その後、公会堂へ移動 「敬神生活の綱領」の

たれているという。 祭礼を執り行うことにより、地域の強固な結びつきが現在でも保 室伏氏によると、 年二回の行事であるが、集落全体で協力し、



鳥居の柱を奉納した室伏由隆氏

勢子辻山神社 写直35

富士岡十二日講

6

その他講にかかわる館蔵資料

持ち回り、 地域の日蓮宗を信仰する女性達により組織されており、講員宅を 本稿で紹介した観音講が行われていた富士岡下河原の地区で 十二日講と呼ばれる講も組織されていた。 毎月一二日に行事が行われていた。 十二日講は、この

や菓子が出され、雑談をして解散となる。 で菓子が出され、雑談をして解散となる。 で菓子が出され、雑談をして解散となる。 が当番の家に集まり、日蓮ぶの経典を中心に奉読する形となる。 が当番の家に集まり、日蓮が考案したとされる法華曼荼羅(髭曼が当番の家に集まり、日蓮が考案したとされる法華曼荼羅(髭曼が当番の家に集まり、日蓮が考案したとされる法華曼荼羅(髭曼が当番の方容としては、夕刻にそれぞれ自宅で夕食をとった講員

依田原十四日講

結ぶ街道沿いに、依田原という地区がある。
二度目の宿場である中吉原宿と、三度目の宿場である新吉原宿をの被害により、二度の所替を経験している珍しい宿場であるが、ていた。この吉原宿は、江戸時代初期に設置されて以降、高潮等富士市内にはかつて、東海道の宿場の一つ、吉原宿が設けられ

いた。本論で取り上げた他の多くの講と同様に、講の行事は講員日の夕刻に集まり、念仏を唱える十四日講という講が組織されてこの依田原には、浄土宗・臨済宗の女性達によって、毎月一四

宅を持ち回りで開催されていた。

甘酒などが出され、雑談をした後、解散となった。団子を作って供えていたという。行事の終了後には、おしるこや仏」の掛軸をかけ、講員の到着を待つが、祭壇には必ず当番宅で当番となった講員の家では、床の間に「達磨」や「南無阿弥陀

軸や祭壇などの資料が、当館へと寄贈されている。 林の田原の十四日講は、平成六年一月の行事を持って解散し、掛

おわりに

いる。

本稿では、館蔵資料を中心に、富士市内の講行事について取り上本稿では、館蔵資料を中心に、富士市内の講にかいわる資料が博物館に寄贈・寄託されていった、現在でも定期的に行事が開催されている講がわずかに残さいった。富士市内では、岩淵の鳥居講、今泉の大山石尊講や子安講と

内容も反映させている。
大と人とを結ぶもの」展の開催に合わせて実施した聞き取り調査の方々からの聞き取り調査を行うことが可能であり、本稿では「講~でもまだ一部の講ではその行事の内容について、かつての講員のしかしながら、多くの講が解散、消滅してしまったといえ、現在

ただし、講が解散、消滅してしまった原因の一つには、講員の高

調査がいつまでも行えるというわけではない。 齢化という大きな問題があり、 かつての講行事についての聞 言き取り

は、 るといえよう。 富士市内の講行事の諸相をより具体的に明らかにしていくために そして調査を早急に実施していくということが今後の課題であ 現在でも聞き取り調査を行うことができる講についての情報収

行会

より、 て再考する機会となるのではないだろうか。 ある。それゆえに、富士市内の講の姿について明らかにすることに 合い関係を築いていくということが、講の持つ大きな意味の一つで いうことを聞かせていただいた。人が集まり、語り合うことで付き で集り、 また、 近年希薄になりつつあるとされる人と人との結びつきについ 今回調査をさせていただいた講員の多くの方々から、 メンバーで遅くまで語り合うということが楽しみだったと 行事

引用・参考文献

- 家総合調査だより』八―一三頁 阿部美香 二〇〇九 「『子安延命地蔵尊縁起』 富士市立博物館 について」『六所
- か』一三六 一四五頁 の鳥居講」『しずおかの文化新書1 荻野裕子 二〇一一 静岡県文化財団 「富士山頂への鳥居奉納-人はなぜ富士山頂を目指すの —旧富士川 , 町岩淵
- 関東民具研究会編 『相模・武蔵の大山信仰』 岩田

- 民俗調查報告書第一九集 静岡県教育委員会文化課県史編さん室編 北松野の民俗―庵原郡富士川町 九九三 静 静岡県 岡県史
- 新庄道雄 一九七五 『修訂 駿河国新風土記 下巻』 国書刊
- 西海賢二 二〇一一 『東日本の山岳信仰と講集団』 岩田書院
- ·平塚市博物館 一九八七 『大山の信仰と歴史』
- 二集 富士川町文化財保護審議会編 一九八一 昔ばなし・伝説集』 富士川町教育委員会 『ふるさと富士川 第
- 犬飼 富士市立博物館 二〇一〇 『富士山縁起の世界-赫夜姫・愛鷹
- 『村山浅間神社 調査報告書』
- 富士宮市教育委員会 二〇〇五
- 大山への代参に関する項について、棒線によって削除されていることが分かる。 また、昭和三七年から使用されている『石尊講員名簿』に添付された規約(昭 昭和二八年から使用された『石尊講連名帳』を見ると、規約に記されていた 若月正己 二〇〇四 『岩淵鳥居講と富士』
- 現在、上和田町には二八の班があり、それぞれの班の女性達が一年ごとに当 番として子安講の行事にお手伝いとして参加している。

和四五年作成)によると、この段階では大山への参詣は三年に一度と明記され

ている。

- とされる観音図が残されていたということも考えられる。 り、観音を信じることの大切さを庶民に説きつづけた。また、その布教活動は、 観音講と白隠禅師の間にも何らかの関係があり、その結果、 観音講に属する人々の支援に支えられていたことから、当時の富士岡下河原の 位置する。)にあった無量寺を再建させるなど、富士の地にゆかりのある僧であ 『白隠禅師は、明治初期まで富士郡比奈村(現在の富士市比奈。富士岡の西隣に 白隠禅師が描いた
- 四 昭和五五年の鳥居講の記録によると、この時には、 せて鳥居を取り外していたことが記されている。 事前ではなく、奉納に合